

代 表 者

小
田

視 察 報 告 書

令和 5年 11月 1日

各 会 派 代 表 者 殿

呉市議会議員

小田 晃士朗
福永 高美
定森 健次朗
岡崎 源太郎
坂井 誠臣
横地 祐子
藤本 哲智

次のとおり視察に参加したので報告します。

1. 視察期日

令和5年10月26日(木)

2. 視察項目

- ①道の駅萩しーまーとについて
- ②道の駅阿武町について

3. 参加議員

小田 晃士朗, 福永 高美, 定森 健次朗, 岡崎 源太郎, 坂井 誠臣,
横地 祐子, 藤本 哲智

4. 随行者

なし

【道の駅萩しーまーとにおいて下記視察した。】

■視察項目①

道の駅萩しーまーとについて

【視察対応者】

道の駅/萩しーまーと 駅長 山口 泉 様（ふるさと萩食品協同組合）

【視察期日】

令和5年10月26日（木）午前9時00分～午前10時50分

【視察目的】

道の駅などの賑わい拠点の整備について本市に活かすため

【視察内容】

沿革・事業内容

年間約6千トンの萩・阿武地区で水揚げされた水産物が集積する山口県漁協萩地方卸売市場に隣接。萩地域で生産される魚を核とした生鮮产品及び特産品の流通促進を図るため平成13年4月に開業。

萩市内の漁協や鮮魚仲買業者、食品加工業者など13組合員（2022年現在は14組合員で構成）が出資し設立した「ふるさと萩食品協同組合」が運営しており、年間平均来場者数は約120万人、事業協同組合による民設民営の道の駅としてビジネスモデルとなっている。

館内は萩市産の水産物（鮮魚・活魚・加工品）を主力商材とした17店舗で構成。鮮魚店4軒、水産加工品店3軒、飲食店3軒、食料加工品店2軒、精肉店1軒、青果店1軒、製菓店1軒、惣菜店1軒、土産物店1軒。雇用約90名（※各店総数）

萩沖で獲れた魚介類を消費者に直接販売する漁港直結の道の駅として「萩の旬市場、市民の台所」というキャッチフレーズで萩漁港隣に開業。

地産地消の実践という明確なコンセプトを持ち、地元市民をコアターゲットに設定した店作り、とびぬけたマスコミ露出量、徹底したマーケティング手法とローコストオペレーションで開業後も大きな落ち込みを見せず順調な業績を確保。

確輸送コストゼロ、中間流通を介さない価格で萩産食材を提供し、平日も地元住民が利用しやすい環境に整備することで来訪者の平日格差を緩和し経営を安定させている。

当該施設は下記を経営理念として運営を行っている。

1. 「近者悦 遠者来」 近き者悦び、遠き者来たる（論語） 地元市民を中心とした庶民市場を目指す

2. 「三方よし」（近江商人の教え） 売り手（私たち）・買い手（お客様）・世間よし（生産者）
3. 「無理は続かない」 実力・能力の8割程度で安定継続していくことを重視
4. マーケティング手法に忠実 基本的な事業設計を綿密なマーケティング手法によって構築
5. 地域のために何が出来るか 「萩市食資源の総合プロモーション」で地域農水産業に貢献

駐車場は無料、普通車80台、大型4台、身障者用4台を用意しており、隣接する市場駐車場の利用も可能。

営業時間は9:30~18:00となっており、ピークタイムは11:00となっている。

利用者は主に萩市内が多いが、広島県を含め、近隣県の利用者が訪れている。

しーまーとは2015年に全国モデル道の駅に選ばれており、他全国モデルに指定されている施設は6ヶ所。また、重点道の駅は35ヶ所あり、広島県内では尾道に設置されている道の駅が多く選定されている。

開館当初（平成13年）は150万人以上が訪れていたが、平成28年以降は126万人から100万人以上が訪れている。コロナ禍で一時は100万人を下回りそのような場面もあったが、終息後の現在は118万人以上の来場者数となり、回復傾向にある。

来場者数を確保するための動きとして、予算をかけずCATVでの食情報の発信やおさかなイベントを開催。

また、他の活動として途上国への活動支援も行っていたが、コロナ禍以降中止。

水産物のブランド化を進めており、例として真フグをブランド化した。

これは魚価のアップが目的であり、より健全な経営を行う上で必要。合わせて雑魚と呼ばれ、廃棄もしくは海に帰っていた「金太郎」という魚種を商品化し、収益の幅を広げることに成功している。

9億~11億円の間で売り上げが推移。コロナ禍であった期間は8億円ほどまで売り上げが減少したが、昨年の売上は9.2億円となっており、回復傾向にある。

こうした安定した売上高の背景には、対面販売を行っていることで単価のアップも受け入れられやすい側面がある。

地産地消を目的とした活動も行っており、地元の方が購入しやすいよう刺身を小売りパックにしての販売や金曜朝市を開催し、地元にも愛される施設として認知されている。

【質疑応答】

Q 地元の方の交通手段は。

A おもに車。地元の方は新鮮な魚の買い物。他、朝の時間飲食店さんの仕入れで来る人が多い。

Q 年配層の地元客が多いと聞いたが、皆さん車か。

A 高齢者の方も車が多い。

Q 建設の背景は。

A 小さい港がそれぞれあったのをひとつにまとめた。それに対して直売所をつくる必要があるということが最初のスタートだったが、つくる寸前で道の駅の認定受けることができるのではないかという話になった。

Q 費用や貴社の財産は。

A 建物が5,000万、全体で5億円程度。固定資産税、保健、年間400万円程支払っている。外の浄化槽も自分たちのもの。市がトイレをつくってくれたこともあり、市からは108万円トイレの維持として補助金もらっています。

Q 191号県道沿いにあるが国の補助は。

A 国の補助は受けていません。受けられないだけで、道の駅として問題ない。修繕も自分たちでしないといけないので維持コストがかかることはとても大変です。

Q 駅長の経歴は。

A 観光協会8年間勤務。その中萩シーマートの職員募集があり、観光協会として当施設に深くかかわっていたので、声をかけて頂いた。

Q 萩シーマートの構成は。

A 事業協同組合で16人。建物内では他の事業者をいれて90人規模で運営されている（各会社の雇用）。

Q 漁獲量が減った場合の運営は。

A 漁獲量が減ると魚価が高くなる。10年後には深刻になるだろう。ブランド化を進め、ここにしかないものを置くことなど工夫をしないとイケない。

Q 呉での道の駅は可能と思うか。

A お聞きする限り商圈としてはでかいと思います。地域の魅力は何か、どういったコンセプトにするかが大切だとおもいます。萩の場合は250種類の魚がとれることに着目していきました。

Q 民間の大変なところは。

A はじめの立ち上げの出資、出店者を集めることが難しかった。はじめ農協入れようとしたら、はじめの出資額は350万。はじめてのことで成功するかどうかかわからない状態ため、応募があったのは1件のみ。他は当時の加工組合長や漁協関係の方がしぶしぶに出資したという状態だった。

【呉市での展開の可能性】

本市では道の駅が存在しないことから、今回の視察において他市成功事例を学ぶことは非常に重要であった。

しーまーとは海に面していることから本市における地理的状況と似通っており、海を舞台とした賑わい拠点としての活用が、今後移転が想定される地方卸売市場の新しい在り方としても非常に参考になった。

視察先の事業立ち上げについて最も苦勞した小売業者の取りまとめは、本市で展開すると仮定した場合でも同様の問題が予想されるため、地域との連携を今から構築していくことが必要と感じる。

呉市は視察先の萩市と比べ、広島市という大都市が近く、また東広島市との往来が無料道路に連結していることから、商圈が広く取れることがメリットであると考えられ、しーまーのような施設が賑わいの拠点として存在することが必要であると会派として結論付けた。

【道の駅阿武町において下記視察した。】

■視察項目②

道の駅阿武町について

【視察対応者】

阿武町まちづくり推進課長 藤村 憲司 様

【視察期日】

令和5年10月26日（木）午前11時10分～午前12時30分

【視察目的】

道の駅などの賑わい拠点の整備について本市に活かすため

【視察内容】

<道の駅阿武町の変遷>

- ・昭和63年 5月 シーサイド温泉プラザ整備事業がはじまる
- ・平成 元年12月 ふるさと創生資金を活用し、温泉を掘り当てる
- ・平成 3年10月 第1回道の駅社会実験実施
- ・平成 4年 4月 阿武町特産品直売所 オープン
- ・平成 4年 7月 日本海温泉 テルメ阿胡 オープン
- ・平成 5年 4月 公衆トイレ利用開始 道の駅の認定/登録証の交付
- ・平成 5年 7月 道の駅温水プール オープン
- ・平成 7年 4月 多目的広場、ちびっこ広場利用開始
- ・平成15年 3月 むらまち交流ステーション阿武 開所
- ・平成20年 6月 道の駅阿武町再生ビジョン施設整備計画策定検討委員会発足。4回開催。
- ・平成22年 7月 指定管理者制度により、道の駅の管理運営を(株)あぶクリエイションに委託。
- ・平成23年 4月 道の駅新施設基本計画着手
- ・平成26年 4月 道の駅阿武町 新装リニューアルオープン
- ・令和 4年 3月 ABU キャンプフィールド グランドオープン

<概要>

道の駅阿武町は、国道191号線沿いにある、海景に恵まれた道の駅。新鮮な水産物や特産品を揃える物産直売所兼観光案内所、日本海温泉「鹿島の湯」、温水プール、公衆トイレなどがあり、ドライブの休憩所、情報発信基地、交流・憩いの場として利用されている。直近では、はじまりのレストラン「かしま」が2021年にオープン、2022年3月12日に、新たにキャンプ場（正式名＝ABU キャンプフィールド）がオープン。ABU キャンプフィールドのビジターセンター内に、SUNbashi CAFEも同時オープン。

<ABU キャンプフィールドについて>

阿武町まちの縁側拠点施設

コンセプトは「キャンプを目的としないキャンプ場」

○背景

まちの縁側推進プロジェクト（2019～2021年度）

町の魅力を知り、町内への人の流れをつくることで移住や定住を促すプロジェクト。主には、宿泊滞在施設がほとんどない町内に、町の基幹産業である第一次産業をはじめとした生産者の所得向上を目的とした道の駅の売上増、まちの暮らしを体験しミニマムな移住を体験することを目的とした滞在拠点施設、ABU キャンプフィールドを2022年3月12日にオープン。

○今後

地域内経済循環促進プロジェクト（2022年度～）

当キャンプ場を拠点として、さらなる町内の経済循環を促すことを目的としたプロジェクト。主にアブペイといった地域通貨の導入、木の駅の立ち上げ、DMO 的組織（阿武町版 DMO）「阿武町観光ナビ協議会」の支援を実施。

【質疑応答】

Q 来訪者のデータは。

A 直売所のレジデータでは年間26万人だが、関連施設合わせて推計で年間40万人としている。ポイントカードの情報から地元地域の方が15%程と推計している。

Q キャンプ場の稼働率は。

A 業界としては通常2割と言われているが、当キャンプ場は3割稼働している。

Q キャンプ場建設費と、来訪者数は。

A 約8億5千万円。交付金1/2、過疎債1/2であったため、市独自の財源としては約2億円。来訪者は年間約12,000人。売上は年間約3,000万円。

Q 事業者の手数料は。

A 事業者の賃貸料として、7,500円/㎡。とても安いのでもう少し上げてもいいのではと考えているが、当施設の課題のひとつです。

【呉市での展開の可能性】

先の視察で訪問したシーマーとから、10km程度しか離れていない、かつ、販売している商品についても魚を中心とした商品が多いことから、施設の干渉が発生していることを予想していたが、顧客の奪い合いなどの問題は発生していないということだった。

これは本市における賑わい拠点を近距離に配置した場合にも、特色をしっかりと打ち出すことにより、住み分けはできることが考えられる。

阿武町はスノーピークという民間業者との連携により、キャンプをより身近に感じられることを施設の特徴にしていたが、本市において、キャンプ場は主要な道路から離れて設置されていることから、阿武町のように民間業者に協力いただき、キャンプをもっと身近で魅力的な施設とすることで、賑わいを生み出す可能性を大いに感じた。

また、キャンプを通じて本市に滞在いただき、本市の魅力を感じてもらうことで移住定住を促進することができる可能性があると考えられる。